

イタリア学会
第69回大会 プログラム

2021年10月23日(土)

オンライン

オンライン開催

◆ 研究発表 14:00-15:30

14:00-14:30

1. マンゾーニ『婚約者』におけるインノミナートの回心に至る過程について
発表者：山室昌子（京都大学） 司会：霜田洋祐（大阪大学）

14:30-15:00

2. 「迷宮」としての小説——クラウディオ・マグリス『公訴棄却』
発表者：山崎彩（東京大学） 司会：堤康德（上智大学）

15:00-15:30

3. «mica» 再考：心態詞と談話について
発表者：土肥篤（Università degli Studi di Firenze / 日本学術振興会）
司会：上野貴史（広島大学）

◆ 休憩 15:30-16:00

◆ 総会 16:00-17:00

マンゾーニ『婚約者』における インノミナートの回心に至る過程について

山室昌子（京都大学）

アレッサンドロ・マンゾーニの歴史小説『婚約者』 *I promessi sposi* (以下 *PS* と略記) には、第一草稿 *Fermo e Lucia* (以下 *FL* と略記) があり、対応する登場人物の名が異なる場合がある。*PS* のインノミナートに対応する人物は *FL* ではサグラートの伯爵と呼ばれていた。この二者の筋書上の共通した役割は、ドン・ロドリゴからルチアの誘拐を請け負ったが、回心を遂げルチアを解放したというものである。*FL* のサグラートの伯爵から *PS* のインノミナートへと、回心の描き方がどのように改変されたかを探求することが本発表の目的である。

PS と *FL* においては多くのフレーズや表現が共通して使われているため、この二人がどの程度別人であるのかが問題となる。

PS のインノミナートがドン・ロドリゴからのルチア誘拐の依頼を引き受けてから、幽閉したルチアに会いに行くまでの場面では、*FL* には見られなかった要素が多く登場する。これまで通りの悪事を遂行していく「自分」とそれに疑問を抱く「自分」が言わば綱引きをしているような状態である。ドン・ロドリゴと別れた直後、なぜ、ルチア誘拐の約束をしてしまったのかという疑問がインノミナートに浮かんだことが糸口となり、それまでの悪事の累積、神と来るべき死とがインノミナートの心中に思い起こされる。

誘拐されたルチアを乗せた馬車を窓辺で待っている場面においてもまた、その約束を反故にする案を前にインノミナートは逡巡する。このようにルチアの外見も内面もわからぬうちから、自身のした約束に嫌気がさしているのである。一方 *FL* にはこの場面はなく、誘拐の約束を反故にするという考えは登場しない。

FL においても *PS* においても、手下がルチアに同情し、いたく心を動かされたことを知って、ドン・ロドリゴにルチアをすぐに渡さず、城に置くことにする。*FL* では手下が去るとすぐルチアの元へ行くが、*PS* ではあのような「約束をしたのも自分の運命」という考えと反故にするという考えの間で逡巡し、ルチアに会ってみるといふ結論だけを出す。

一方 *FL* には、約束を実行することと反故にすることとの間で逡巡する姿はな

く、計画実行に向けて必要な協力者エジェーディオとの応酬や、伯爵の過去の犯罪についての述懐が描写される。

インノミナートがルチーアに会うと、ルチーアは必死に働きかけ、期せずして伯爵／インノミナートの回心の導き手となっていく。ルチーアはインノミナートが垣間見せた善なる一面をとらえて、彼にも *compassione* (同情) *buon cuore* (思いやり) があると口にし、それを生かそうとする。これらは *FL* のルチーアにはなかった語句である。

ルチーアとの対話の後の晩、伯爵／インノミナートが眠れぬ夜を過ごすという設定が共通しているにもかかわらず、*FL* と *PS* には多くの違いがある。*PS* にのみみられる内容はインノミナートの自己省察である。自身の生涯の総点検にはまり、自己否定的になった「新しい自分」を見出す。自殺を考えて銃を手にするが、死後の手下どもの行状を想像して思いとどまる。これらすべて、*FL* の伯爵の眠れぬ夜には出てこず、自己省察といえるほどの思索はない。一方で、両者に共通する内容は、「どんな悪魔を背負ったことか」という嘆きと、「一つの慈悲の行いのために神様はたくさんのごことを赦してくださいます」というルチーアの言葉を思い起こし、彼女を解放するという意思を述べていることである。

伯爵／インノミナートは、物語の次の展開では、ボッロメーオ枢機卿の来訪を歓迎する村人たちのざわめきを見て、彼に会いに行く決心をする。

ボッロメーオ枢機卿と伯爵／インノミナートの対話の場面では、回心する者をあたたかく迎え入れるという枢機卿の姿勢が、*PS* でより顕著になった。インノミナートにおいては *gioia* (喜び) を感じるという表現が特徴的であり、伯爵にあった自己卑下の表現は取り去られた。

インノミナートを捕らえていた苦悶や逡巡を描くことで、回心をすることの切実さが説得力をもった。苦悩の中で行きつ戻りつしながら回心へと向かって行く姿が *PS* では描かれた。

「迷宮」としての小説——クラウディオ・マグリス『公訴棄却』

山崎 彩（東京大学）

クラウディオ・マグリス（1939- ）の小説においては、しばしば矛盾する言説が両立しアイロニーを響かせる。本発表においては、2015年『公訴棄却 Non luogo a procedere』を取り上げ、特異な構造をもつこの小説の中でどのようにアイロニーが表象されるかを論じる。まず、マグリスの考えるアイロニーとは何かを考察する。次に、小説の構成を検討し、先行する小説で用いられた語りの方が、より有機的なつながりを持つように改良されて用いられていることを明らかにする。最後に、このような語りの工夫によって描き出されるアイロニックな状況がどのような効果を上げているかを検討して結びとしたい。

小説『公訴棄却』は、他のマグリス作品と同様に、虚実の入り交じった夥しいエピソードが集まってモザイクのようにひとつの壮大な物語を作り出す。しかし、小説の全体像は、読み終わるまでわからないように仕組まれ、読者は常に迷宮の中にいるような感覚を抱かされる。

小説『公訴棄却』の主要な登場人物はふたりである。まず、「彼 lui」とだけ呼ばれる男がいる（これが、ディエゴ・デ・エンリケという実在した人物であることは小説の最後で明かされる）。次に、稀代の蒐集家であった「彼」の遺した膨大な蒐集品を展示する博物館「平和のための戦争博物館」の準備をする「ルイーザ」という学芸員がいる。小説は、ルイーザが「博物館」について検討するところから始まる。その中で、第一の登場人物「彼」が、単なるマニアや好事家ではなく、どうやら、トリエステにあったナチスの強制収容所「リジエーラ・ディ・サン・サッバ」の秘密を握る人物であるらしいこと、原因不明の火事で死亡したこと、彼の死後、「リジエーラ」の重要な証拠品である彼の「日記」が消えたことなどが明らかになる。ルイーザは風変わりな「彼」の遺志に従い、「彼」が自分の蒐集物に付していた大量の「メモ」を並べて「博物館」の展示構想を練る。その後、テキストには空想上の博物館の「展示室」と「展示物」についての説明書きが現れる。続いて、その「展示物」にまつわる物語が綴られる。一見したところ互いに無関係な無数の「遺物」とそれにまつわるエピソードは、その間に挿入される「彼」すなわちディエゴ・デ・エンリケの物語と、ルイーザの物語によって次第にひと

つに束ねられてゆく。その行き着く先には、強制収容所「リジエーラ」がそびえ立っている。

強制収容所「リジエーラ・デイ・サン・サッパ」は、作者自身も述べているように、この小説の中心に閉じ込められた「ミノタウルス」である。この強制収容所で処刑されたのは3千人とも5千人とも言われるが、いまだに詳細は明らかになっていない。ドイツ軍は撤退直前に焼却炉をダイナマイトで爆破し、戦争犯罪の証拠を隠滅した。また、その後にリジエーラを管理した英軍は、関係書類をすべて本国へ持ち帰り閲覧禁止とした。だが、一方で、ドイツ軍が去った後のリジエーラの監房の壁や扉には、囚人たちによる多くの「落書き」が遺されていたことも知られている。これらのかろうじて遺された「落書き」も、しかし、後にすべてが白く上塗りされて消され、この強制収容所はなかば忘却の河に沈んだ状態、歴史的な空白となる。

「リジエーラ」について書くこと、それはマグリスがかつて述べた「(忘却の)河に沿って歩き、流れをさかのぼり、遭難した存在を水中から救い出すこと、川岸にかろうじてたどり着いた生存者を発見し、紙という仮のノアの箱舟の上に乗船させる」活動に他ならないのだが、それは、同時に不可能な試みでもある。読者は、「リジエーラ」の真実にたどり着くことはできない。犠牲者は救われず、犯罪者は罪を問われない。しかし、この迷宮を脱出するとき、読者は当初の期待とは異なる結論へと導かれる。

«mica» 再考：心態詞と談話について

土肥 篤 (Università degli Studi di Firenze／日本学術振興会)

辞書においてしばしば「否定を強調」する語であると定義される mica は、Cinque (1976) によれば文脈の中に存在する「予測 *aspettativa*」と関連した機能を持つ。この分析によれば、mica は文の命題ではなく、話し手、聞き手、またはその両方が持つ予測を否定する語であるとされる。たとえば、話し手が肉屋の冷凍室に入って次の文 (1) を発話したとする。この時、話し手は「冷凍室の中が寒い」という命題を否定するだけでなく、その命題が真であるとする予測、すなわち「肉屋の冷凍室は寒い」という一般的な知識から導かれる想定を否定しており、mica の機能は前者でなく後者にあるとされる。

(1) *Non fa mica freddo, qua dentro.* (Cinque 1976: 109)

「この中、寒くないな。」

この分析が直面する記述上の問題は、mica を含む発話において「予測」それ自体がむしろ話し手が伝えたい内容の一部をなしているケースが存在することにある。次の例では、話し手は会話を録音されており、内容が少なくとも言語学の教員に聞かれることを知っている。この前提のために社会的・倫理的な理由から答えづらい質問に対して回答を断ったのち、次の文を発話する。

(2) *non sono mica scema* (KiParla: TOA3004)

「私だってバカじゃないんだから」

この発話において否定されている命題、すなわち「話し手はバカである」が真であるという予測は、明らかに文脈の中に存在しない。むしろ、この文によって話し手が伝達することを意図しているであろう内容の主要部は「録音されていることを分かっているながら問題になり得る発言をする者はバカである」というものであって、文の命題はこの内容を推論によって導くための前提である。この点において (2) における mica の機能は (1) と異なっているだけでなく、Cinque によ

る分析がとらえることのできないものの例である。

Cinque の分析が前提としている発話観は、複数の文が集まって構造を持った「談話」をなしているというものである。この見方のもとでは、mica を含むいわゆる談話標識は個別の文ではなく談話のレベルで機能し、複数の文の間関係を示す語である。一方で、認知言語学の枠組みでは、談話研究は発話理解にかかわる認知プロセスの研究として見直されている。本発表ではまず、後者の枠組みに沿った分析が (1) だけでなく (2) のような用法を自然に説明できることを示す。

談話標識としての mica という見方は、近年発展してきているイタリア語における心態詞研究においても維持されている。こうした研究において mica は保留つきではあるものの心態詞の一種として数えられ、発語内行為を修飾する語の一つとして分析されている。本発表の後半では、談話に関する研究の転換が心態詞研究をどのように発展させ得るかについて検討する。

引用文献

Cinque, Guglielmo. 1976. "Mica." *Annali Della Facoltà Di Lettere E Filosofia dell'Università Di Padova* 1: 101–12.

KiParla = Mauri, Caterina, Silvia Ballarè, Eugenio Gorla, Massimo Cerruti, and Francesco Suriano. 2019. "KiParla Corpus: A New Resource for Spoken Italian." <http://kiparla.it/il-corpus/> (2021年7月30日閲覧).

イタリア学会

Associazione di Studi Italiani in Giappone

〒 223-0061 神奈川県横浜市港北区日吉 4 丁目 1-1

慶應義塾大学文学部 藤谷道夫研究室内

E-mail: studiitalici@gmail.com

URL: <http://studiit.jp/>